

Q.0 もうちょっと近い教室はありませんか。文学部棟に。

5 A.0 探せばあるかもしれませんが。受講生には迷惑かもしれませんが、赤井が広島大学出身の人たちに文学部から追い出されている感じがよくでているので、ここに世の中、人生の縮図を見ると思えばどうでしょうか。

Q.1 校舎移動を伴いますので、始業終業時刻に余裕をみていただけるとうれしいです。受(ママ)業の内容については特にありませんが、口をはさむ形の質問はOKなのでしょうか？

10 A.1 始業終業時刻については、前後に多少余裕をみることにして、具体的には、次の授業の際、みなさんと相談しましょう。授業中に質問してもらって構いません。ときどき、こちらからも尋ねることにしましょう。

Q.2 今日の授業の中で、人の名前や定理のような名前が出てきましたが、私自身哲学についての知識が高校のセンターをかじった程度なので、分からないところが多かったです。この授業ではある程度哲学について知っておかなければならないとついていけな

15 うか。  
A.2 そんなことはありませんので、わからないことがあれば、授業中なり、この質問の用紙なりで、尋ねてください。

20 Q.3 赤井先生は藤澤令夫さんの講義を実際にうけていたのですか。

A.3 はい。修士論文の審査をしていただいた最後の学年です。

Q.4 今、日本の哲学の先生方は論文を書く時(研究する時)、主に、実際の哲学問題について論文を書くのですか、それとも歴史的の文献について論文を書くのですか。

25 A.4 両方あると思いますが、哲学史的な(歴史的な)研究の方が多のような印象を受けます。哲学にもいろいろな分野、研究対象があるので、現在、問題として意識されている分やでは、歴史的な研究は後回しになっていたりします。論理学や心身問題についての研究等。少し古いですが、例えば、西田幾多郎の場合は、Selbst-Denken(自分の頭で考えること)が中心になっていますが、授業でも名前を挙げた、九鬼周造の『偶然性の問題』という著作の場合は、著者自身も哲学史的な研究を行ないながら、それを踏まえて、自分の考えを展開している(Selbst-Denken)という点で、バランスがとれていると思います。

40 Q.0 哲学の著作を読む際には他（ママ，多？）言語の知識が必須とのことなので，ラテン語ギリシャ語は無理だとしても，ドイツ語とフランス語くらいは読めるようには訓練してみようかと思いました。

A0 ヨーロッパの言葉（欧印語族）は，2つ以上やれば，3つも5つも変わりませんから，是非，文法だけは，ギリシア語とラテン語もやるように．というのも，英語の場合もそう  
45 ですが，ラテン語やギリシア語の知識があるのとないのとでは，英語・ドイツ語・フランス語の分かり方，読解力が全然違ってきます．それは，近代語の語彙の大部分，それも哲学のような学問用語の大部分は，ラテン語やギリシア語がもとになってできているので，ラテン語やギリシア語を知っていれば，英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語  
50 を読んでいるときに初めて見た単語の意味が，辞書を引かなくても類推してわかるようになります．ギリシア語とラテン語の学習には，はじめのうちは時間がかかると思いますが，あきらめずに続けてやれば，かならず，報われます．だから，哲学の履修課程には，学部生のうちに学ぶように，ギリシア語とラテン語を開講しているのです．ついでに  
55 言っておくと，英語・ドイツ語・フランス語にも，日本語の古文のように，昔の英語・ドイツ語・フランス語があって，英語なら，OE(Old English)，ME(Middle English)と17世紀以降の現代英語があり，みなさんが普通に英語だと思っているのは，現代英語のごく最近の一部分です．発音も綴りも，文法も違うところがあるので，勉強しないと読めません．ドイツ語にも，もっとも古いものは別にして，中高ドイツ語（エックハルトなど），初期新高ドイツ語（パラケルススなど），新高ドイツ語（近現代のドイツ語）とがあります．フランス語も同様で，古フランス語から，17世紀のフランス語，それ以降，現代の  
60 フランス語と変化していますが，古フランス語を学んでおくと，17世紀のデカルト，パスカル，ライプニッツ，マールブランシュらの，古いフランス語を読む際に役に立ちます．17世紀，18世紀の哲学者の書いたものを読むには，教養科目のドイツ語やフランス語の授業で使った辞書では，役に立ちません．ですから，哲学史の研究をするにあたって，例えば，現代のドイツ語しか知らないで，ドイツ語をやってます，などという人がいますが，私に  
65 言わせれば，哲学の素人すぎて，ちゃんちゃらおかしいのですが，この話はこのくらいにしておきましょう．

Q1 昔は，哲学のことを「理学」と呼んでいたようですが，「理学」の方が理（ことわり）という漢字が含まれていて哲学のことが上手く表現されていたように思います．

70 A.1 そうですね．高校のとき，「物理」を「ものごとわり」と読んで悦に入っていたのを思い出します．科学哲学・科学思想史の授業のほうで指摘したように，最初，西周（にしあまね）は，「ヒロソヒ(philosophy)」を「希賢学」や「希哲学」と訳したのですが，その後，「希(philo-)」が脱落して，「哲学」になってしまっただけでなく，「哲」も「かしこい」という意味ですから，かろうじて「かしこいこと」を追求する学と

75 いう意味は残っています。この西周による「哲学」という訳語が定着する以前には、「理学」という訳語も使われたのですが（中江兆民？）、「哲学」が定着すると、現在の理系の理学部のほうの意味で、「理学」が使われるようになったのだと思われます。

80 Q.2 たくさん出てきた固有名は、ほとんどわからなかったですが、ダイナミックな歴史の流れは感じとれました。ヤスパースのニーチェ・ショーペンハウアーのくだりは、学問というよりはファンの心理ですね。自分自身「哲学を学ぶということ」を学ぶ段階なので、前回、今回のテキストはたいへん参考になります。

85 A.2 おっしゃるように、ヤスパースのアドバイスも、ショーペンハウアーの「哲学史について」も、それに、二つの『～を学ぶ人のために』の鼎談も、哲学ファンのためにではなくて、これから哲学をやろうとする人が、学問としての哲学を学ぶ態度と方法について語っているのだということが分かってもらえれば、一応の目的は達したことになります。

90

95

100

105

110

115 Q.0 最低限の哲学史の知識をもっていなかったり、ドイツ語をやっているのに現代のドイツ語しか読めない哲学者がいるというのが少し信じ難かったです。

A.0 そういう人は、「哲学者」の定義次第ですが、職業的に哲学担当の教員としては、まずいでしょうが、教員としてではなく、個人的に哲学をするぶんには、かまわないでしょうが。

120 これに関連して、哲学をやっていると自称する人たちを見て、当時の現状を嘆いているプラトンの言葉を思い出します。

Τὸ γοῦν νῦν ἀμάρτημα, ἦν δ' ἐγώ, καὶ ἡ ἀτιμία φιλοσοφία διὰ  
ταῦτα προσπέπτωκεν, ὃ καὶ πρότερον εἴπομεν, ὅτι οὐ κατ' ἀξίαν  
αὐτῆς ἀπποῖται· οὐ γὰρ νόθους ἔδει ἀπτεσθαι, ἀλλὰ γνησίους. [Plato,  
125 *Resp.* VII, 535C5~8]

「少なくとも、現在行なわれている間違いと、哲学にふりかかっている軽蔑とは、こうしたところから起こっているのだからね」とぼくは言った、「つまり、前にも言ったように、その資格もないような人々が哲学に手をつけているからなのだ。というのは、生まれのいかがわしい者たちがこれに手をつけてはならなかったの  
130 であって、正しい生まれの者たちにだけそれが許されるはずだったのだから」  
[プラトン／藤澤令夫訳『国家』第7巻より]

135 厳しいようですが、哲学するには、その資質をもつ者が、しかるべき訓練を経て、はじめ  
てできる、ということが言われています。現在の我々に関して言えば、趣味や自称で哲学  
するつもりになるのは自由ですが、学問としての哲学（学生諸君はこれに該当する）、それ  
も、教員として責任のある立場で哲学するには、しかるべき資質をもつことは当然とし  
て、それだけではだめで、しかるべき時期に、しかるべき訓練を経て、一定の学殖（現在  
では、これが外国語＜少なくとも、ギリシア語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語  
140 の5つ＞の読解力や哲学史の知識）をもたなければできない、ということです。まともな  
大学の哲学の学士課程（学部のこと）では、この訓練ができるような授業が開講されてい  
ます。ついでにまた、比喩的な言い方をしているニーチェの次の言葉も思い出します。

Ich sehe durchaus nicht ab, wie Einer es wieder gut machen  
kann, der versäumt hat, zur rechten Zeit in eine gute Schule  
145 zu gehen. Ein solcher kennt sich nicht; er geht durchs Leben, ohne  
gehen gelernt zu haben. [Nietzsche, *Der Wille zur Macht*, 912 (Kröner)]

私は、適当な時期にすぐれた鍛錬を怠った者が、ふたたびそのつぐないをしよう  
とは、けっして考えない。そうした者は、おのれを知ることなく、歩行を習得し

150 ておかないままで生涯を歩みたどるのである。(ニーチェ/原佑訳『権力への意志』より)

ここで、「適当な時期に」と訳されているのは、zur rechten Zeitですから、「しかるべき、適切な時期に」という意味です。人によって資質や環境が異なるでしょうから、一律にいつかは言えませんが、哲学の勉強ということ言えば、多くの場合、学部生の時期に、  
155 ということになるでしょう。

実際に、(最近では、次にいうことがあてはまらなくなっているのですが、なぜそうなのかは別に考える必要がありそうです)某K大には、哲学・思想系の専門分野として(中国やインドを別にして)、哲学、西洋哲学史(古代)、西洋哲学史(中世)、西洋哲学史(近世)、倫理学、宗教学、などがありますが、その昔は、どの分野の担当の先生も、  
160 その先生自身の出身はほとんど、哲学でした。某T大出身の先生もみな、某T大の哲学出身でしたが、某K大出身者に限って、よく知られた名前を挙げてみると、哲学担当の先生が哲学出身なのは当然として、天野貞祐(西洋哲学史、後に、倫理学担当)、西谷啓治(宗教学、後に、西洋哲学史(近世)担当)、山内得立(西洋哲学史、後に、哲学担当)、野田又夫(西洋哲学史、後に、哲学担当)らは、みな哲学出身でした。逆に、例えば、倫理  
165 学出身で哲学担当という例がひとつもないのには、理由があると思います。それは、学生諸君が学部生のうちに受ける授業(講義や演習)の内容にあります。哲学では、西洋古典語(ギリシア語、ラテン語)と哲学概論や西洋古代、中世、近世哲学史概説などの講義(論理学もある)のほかに、英語、ドイツ語、フランス語の文献を読む演習が必修になっているのに対して、倫理学では、西洋古典語(ギリシア語、ラテン語)が必修になっていない、  
170 という点にあります。ただ、哲学や西洋哲学史以外の学生でも、センスのいい学生は、必修ではなくても、西洋古典語(ギリシア語、ラテン語)の授業を選択して受講しにきたりします。この辺りに、原因のひとつがあるように思います。そしてこれが、学問としての哲学・西洋哲学史の性質・特徴でもあると思います。

175 Q.1 入門として、たいへん参考になりました。印哲入門をとっています。他思想にも興味があるので、とります。

A.1 よいと思います。そうしてください。2年になってからも、各分野の「概説」や「概論」を受講することを勧めます。

180 A.0へ補足：ヘーゲル『精神の現象学』の翻訳で知られる金子武蔵は、東大の倫理学担当の先生でしたが、彼も出身は、倫理ではなくて、哲学でした。また、田中美知太郎『時代と私』(p.243)によれば、東大の学生たちに乞われて、田中先生が東大の山上御殿で行っていたギリシア語のテキストの読書会に、学生として金子さんも参加していたことがわかります。当然のセンスでしょう。ヘーゲルを理解するには、ギリシア語の知識は必須です  
185 が、ドイツ語だけ読んでいるヘーゲル学者のヘーゲル理解は大丈夫なんでしょうか？

Q.0 引用の仕方や底本が哲学者によって決まっていたりいなかったりという話でしたが、それは哲学者の人気と言うかつまりその哲学者を研究している人の数が多い程ルールとして決まっているということでしょうか。

A.0 その通りです。

Q.1 本日の引用の方法の講義（ママ，義），参考になりました。テクニカルな知識にはたいへん不安があるので、こういう講義（ママ，義）は、ありがたいです。某T大，某K大って、あの有名なT大，K大ですか？

A.1 そうです。配布した講義，受講科目の資料は，過去の京都大学と名古屋大学のものです。哲学の分野では，西洋古典語（ギリシア語とラテン語），それに，西洋のもの以外に，インドや中国の哲学史概説や思想史概説を履修することが求められているのがわかると思っています。

Q.2 昔の哲学者に関してはその研究の中で様々なルールが決まっている様でしたが，その話を聞いてますます哲学関係の論文やレポートを書くのが恐ろしくなりました。

A.2 大丈夫です。この授業を受講したからには，きちり書けるようになってもらいますので。

Q.3 ……同じ文学部でも専門が違うと学ぶ内容が全然違うのだなぁと思いました。また，哲学は原典をもとに考えなくてはならないので，とても難しそうだと思いました。引用の仕方1つでも細かく決まっているのだぁと思い，驚きました。

A.3 哲学に限らず，それぞれの分野には，論文を書く際のルールがあるはずですが。できるだけ早い時期に，内容は理解できなくてもできなくてもよいですから，日頃，授業を受けている自分の分野の先生達が書かれた研究論文（著書，論文など）を図書館で探して読んで，引用の仕方や文献表の書き方，本文や引用文の書式などを見ておくとよいと思います。そうすると，もっと驚くことがあるかもしれません（し，ないかもしれません）。

前回の「A.0へ補足」のさらに補足：さらに思い出したので，追加しておきます。名古屋大学の文学部には，哲学しかなく，倫理学はありませんが，以前は哲学の分野の中で，倫理学関係の授業を担当する先生がいました。私は習ったことのない，藤野渉先生ですが，藤野先生の出身も京大の哲学で，倫理ではありません。また，かつて阪大の倫理の先生だった，相原信作先生も，出身は哲学です。また，その阪大の倫理学が制度の変更によって（改善か改悪か，歴史が明らかにするでしょう），臨床哲学（つまりは，応用倫理）と名称を変えたとき，担当教授のひとり，鷺田先生は京大の倫理出身ですが，もうひとりの中岡先生は，京大の哲学（西洋哲学史）出身です。つまり，哲学出身の人が，倫理を担当する例はいくらでもありますが，その逆は……ということです。

225 Q.1 今回の西洋哲学の卒論中間発表会を聞いて4年生の皆さんはかなり高度な卒論テーマ  
を選ばれているなど感じました。自分は哲学に関する知識はほぼなくて、テーマに関して  
全く分かりませんでした。1番に考えたことは、この高度な卒論のテーマを、どのような  
過程で明らかにしていくのかということです。おそらく、外国語で書かれた哲学書を参考  
230 にしながら考察していくのでしょうか、そのことを考えてもとても大変な作業になるなど  
感じました。哲学を学ぶ人は哲学だけの知識だけでなく、語学力も絶対に必要なのだと改  
めて感じ、尊敬の感情を抱きました。

A.1 テーマが高度すぎて、それを扱う学力、学殖が不足し、テキストの翻訳にたより、他  
人の学説の紹介で終わってしまう場合もありますし、翻訳がないテキストに体当たりして、  
かじりつき、それなりの成果をあげる場合もあります。学生本人の資質と、それを見極め  
235 て助言する教員の力量が問われるところです。

Q.2 西洋哲学分野・哲学分野の卒論・修論中間発表会に参加して、西洋哲学・哲学分野で  
は、どういった内容を扱って、どういった章立てで、卒論を書いていくのかということに  
ついて分かりました。私は、日本史を専攻しているのですが、日本史の場合は西洋哲学の  
240 原典のような古文書を読み、それをもとに卒論や修論を書くので、そういう点では似てい  
るなぁと思いました。

A.2 似ているどころか、同じだと思います。私が大学1～2年の教養科目の西洋史の講義  
と演習（ドイツ語文献を読む）でお世話になった、ドイツ史学思想がご専門の岸田達也先  
生の口癖が「読めずして語れない」でした。テキスト、扱う史料を読めなければ、何かを  
245 言う資格がない、ということです。

Q.3 論文として、前提条件に疑問の余地があるにもかかわらず論を進めている人が見受け  
られるのですが、それはアリなのでしょうか。また、「～べき」の取り扱いも危うい気が  
するのですが、参考文献として、同一書名で、訳者ちがいの文献があげられていますが、  
250 比較対照のためなのでしょうか？

A.3 すべて研究は、ある意味で、仮言推論であるといえると思います。つまり、もし、こ  
れこれのことが、真であるならば（前提）、かくかくじかじかのことが言える（結論）、  
という形式です。この場合、結論が真であることを最終的に保証するためには、前提の真  
であることも、別途、論証・証明する必要がありますが、それは別の研究にゆだねること  
255 になります。しかし、こういう研究をする場合の前提は、きわめて蓋然性が高く、おそら  
く真であると思われるので、研究自体が無駄になる可能性は低いと思って研究しているの  
です。また、仮に前提が真でないことが証明されることが、いずれあっても、その前提の  
下では、何が言えるかを明らかにした研究自体が無意味であるとは、その内容次第ですが、  
思わないことです。研究分野によって、その評価の仕方は異なるでしょうけれども、また、

260 「～べき」という価値判断を表す表現は、たしかに、発表者の地の文で使う場合は、その  
根拠を示せなければ意味がありませんが、研究対象にしている哲学者の文献自体で使われ  
ている場合は、また、別に考えなければならないでしょう。最後に、同一文献の異なる訳  
者による訳書をを扱っているのは、おっしゃる通り、比較対照のためですが、翻訳が複数  
ある場合は、手に入る限り検討するのが、文献学的に誠実な態度でしょう。大体、どの翻  
265 訳もどこかまずいところがあるものなので、これは、すでに紹介したように、翻訳につい  
て、ショーペンハウアーが言っている通りです。

270

275

280

285

290

295



300 Q.0 . . . (略) . . . 「思想は思想から出発すると全然だめなのです」という言葉は  
とても奥が深いなあと思いました。思想という概念に・考え方に捉われていると、思想の  
本質は見えないのかなあと思いました。論理学と哲学は全く別の分野ですか？それとも、  
哲学から、論理学が派生したのですか？

305 A.0 森さんの言葉については言いたいことがあるのですが、Q.1のほうにまとめることに  
して、後半について、一言。古代ギリシアにおいて、「ピロソピアー（哲学）」が学問全  
体の、いわば、総称であったときには、哲学の中の1部門として、論理学に相当するもの  
がありました（アリストテレスの論理学書「オルガノン」）。それ以来、哲学の他の部門  
と論理学は密接に関係をもって現在に至っています。前回の授業で、哲学研究室に移動し  
た際、少し話したかと思いますが、現在の大学では、文学部の広い意味での哲学の中での  
「論理学（記号論理学も含む）」と、工学部（情報科学）で技術的に用いられる「論理  
310 学」、理学部の数学（または、数学の教員養成系）で扱われる「論理学」（数学基礎論と  
か）と大きく3つに分かれていると思いますが、広島大学の規模の大学ならば、本来、現  
在、文学部の哲学で開講している論理学は、1～2年の教養科目として履修しておき、文  
学部の哲学では、教養で学んだことをもとに、さらにその哲学的な意味を考えること（数  
理哲学）をやるべきなのですが、現状では、教養科目に論理学がないので、そうってい  
315 ません。

Q.1 森有正の『思索と経験のために』の1文「思想から出発したら全然だめなのです」  
の意味について自分で考えてみました。ひと言で言う「思想は自分で考えるものである」  
と言いたいのではないのでしょうか。ある言葉を、他人の考えや意見を考慮しながら解釈す  
320 るのではなくて、自分でその言葉から何が読みとれるかを考え、解釈することこそ、思想  
や哲学を学ぶうえで大切なことであると森さんは考えたのだと思いました。これは哲学や  
思想だけでなく色々な学問に通じることだと思いました。

325 A.1 Q.0で言われていることも、このQ.1で言われていることももっともなのですが、森  
さんの意図はもっと単純でストレートです。哲学や思想を扱うための道具としての言葉を  
学べ！ということです。それも、自分で考えるだの、余計なことをせずに、完全に身につ  
けて自分で操れるようになるまで訓練せよ！と言っているのです。

Q.2 今日のテキストで、森有正が教育を職人の手順の修練になぞらえているのを読んでお  
どろきました . . . (略) . . . 先々週のテキスト『哲学を学ぶ人のために』から、  
330 p.21 田中氏—論理学に対するものとして、弁証法が上（ママ、挙）げられていて21ペー  
ジ後半を読むと、評価が低いようですが、実際どうなのでしょう。

pp. 31 - 32 田中氏—哲学のテーマになりそうな「人間とはなにか」について語ってお  
られますが、けっこう雑にかんじますが、これは論文や思想が作られる上で、シノプシス

が作られている過程のように思っているのでしょうか？

335 A2 森さんの言葉については、Q.0とQ.1に対してコメントした通りです。(略)した部分  
については、いつか、まとまった形になったら、教えてください(少し、期待していま  
す)。さて、『哲学を学ぶ人のために』の田中先生の言葉ですが、p.21の「弁証法」とい  
うと、私などは、ヘーゲルの「弁証法」や、マルクス・エンゲルスの「弁証法的唯物論」  
をまず、思い出すのですが、田中先生の「弁証法」に対する評価の低さは、「弁証法」そ  
340 のものに対してよりも、*dialektike*(*dialectica*, *dialectic*, *dialectique*, *Dialektik*)を「弁  
証法」と日本語訳して使っている主として、日本のドイツ哲学の研究者に向けられてい  
ると思います。これは、ある意味で、先の森さんの言葉と通じるところがあると思います。  
田中先生、藤澤先生と続く、西洋古代哲学史研究の伝統では、ギリシア語の原義に従って  
「問答法」と訳します。田中先生の「哲学の根本問題」では、一度ならず、「わが国の哲  
345 学の状況も、ドイツ哲学の出店のようなもの」ということが言われていて、明らかに批判  
の対象は、*Dialektik*そのものよりも、それを「弁証法」と訳して分かったつもりになっ  
ている日本のドイツ哲学の研究者です。後半のpp. 31 - 32ですが、これは論文ではなくて  
鼎談ですし、おっしゃるように考えてよいのかもしれませんが。ただ、ここで、田中先生が  
念頭において批判している論者が誰かわかりませんが、その論者の論じ方にあわせてい  
350 のかもしれません。

355

360

365

370

Q.-1 (前回のQ.2再掲) 「pp. 31 - 32, 田中氏—哲学のテーマになりそうな「人間とはなにか」について語っておられますが、けっこう雑にかんじます・・・」

375 A-1 前回のQ.2の後半について補足で、ございます。「雑」という表現で何を言っておられるのか次第ですが、授業でのやりとりから察して、田中先生が「長い伝統の中で、人間が造ってきた、創造してきたものが人間なのであって、そういうものをみんな取払ってしまっ

380 て、なにか自然の動物に帰って見たって、そんなものは人間でもなんでもありません。そういう人間には、ぼくは興味がないんだ」と立場を表明しているのに対して、そうではない立場もあると主張したいのならば、それはそれでよいので、その人は田中先生と違う立場である、というだけのことで、ございます。田中先生の立場の表明は、明確なのであって、他の立場の可能性を述べていないことを指して「雑」な議論というのであれば、

385 「雑」という言葉の理解が違うので、ございましょう。私などは、「雑」どころか、逆に、理由も挙げて、緻密で明確な述べ方であると感じるので、ございます。あるいは、田中先生の言葉遣いが、日常的なわかりやすい言葉を使っており、いわゆる、「範疇」だの「超越論的」だの、哲学の専門用語を用いて、議論を展開していないので、「雑」という印象を受けられたのであれば、それは、田中先生の語り方と、哲学に対する、不幸な誤解によると、言わなければならないでしょう。田中先生の言葉を引用すれば、

390 わが国の哲学は、私の幼稚な問題を受けつけてくれるには、あまりに狭く、単色に専門化されていたのである。しかし初歩的な問題こそ、真に哲学的な問題であり、哲学の歴史を根本的に規定したソクラテスは、つねに自己を素人の立場においたのである。私はいわゆる哲学青年のごとき者を、読者として少しも歓迎しない。私の求める読者は、ただ学を好み、正義を愛する人だったら、どんなに仕合せであろうと思うだけである。また私は、何ら独特の論理を用いたりすることもないから、読者には普通の判断力と良識とを期待するだけである。

395 また論文の体裁も、講義口調のいわゆる学術論文—そのあるものはしかし通俗思想を特殊語に翻訳しただけのもの—や、雑然たる読書の刺戟によって生じた感想や思いつきを綴った、いわゆる悪戦苦闘のドキュメント—実は一種の読書ノートに過ぎないもの—などとは全く異なり、自分だけの問題を読者にも理解してもらうために、プラトンの先例にならって、問題そのもの

400 の出来るだけ分かりやすい取り扱い方を、いろいろ工夫しなければならなかった。論文はいずれも、対話者の登場しない対話篇なのである。[田中美知太郎『ロゴスとイデア』あとがき、文春学術ライブラリー版、p. 372.]

と、ということなので、ございます。この中で言われている、「通俗思想を特殊語に翻訳しただけのもの」や「実は一種の読書ノートに過ぎないもの」が何を指しているお分かりますか？それから、ついでに申し上げるのでございますが、この質問者は、過去の質問の中で、「受(ママ)業の内容については特にありませんが、口をささむ形の質問はOK

405

410 なののでしょうか？」(第1回(2014/10/01))の "OK" とか、「論文として、前提条件に  
疑問の余地があるにもかかわらず論を進めている人が見受けられるのですが、それはアリ  
415 なののでしょうか。」(第5回(2014/10/29))の「アリ」だとか、先生である私を先生  
とも思わぬ、タメグチといってよい表現を使っておられますが、相手が私だから何事もなく  
済んでいます、他の先生にはこういう表現を使うのはおやめになったほうがよろしい、  
のでございます。私の場合でも、レポートや卒論の地の文でこういう表現が使われたら、  
その時点で評価されない、と覚悟しておいてください。では、どうか書けばよいのか、ご  
自分で、文字で書き表す文章語として適切な表現をお考えください。

Q.0 今回読ませていただいた論文(?)は、とても面白かったのですが、やばそうなので  
発表はやめておいて欲しいです。(赤井先生が消されてしまいそうで心配です。)

420 A.0 心配していただいてありがとう、ございます。今のところ、発表する予定はありません  
から、ご安心くださいませ。しかし、今は赤井が消されても、長い目で見れば、某先生  
425 方の論文やご本のほうが学問の世界からは(評価されずに)消え去ると言えるのでは、ご  
ざいますまいか。歴史を振り返れば、本人の存命中は、同時代人から顧みられず、死後、  
かなり経ってから評価されて、逆に、同時代にはやっていたものは、価値のないものとし  
て忘れ去られる、という例が少なからずあるようで、ございます。してみれば、私は消え  
425 去っても、命あるうちに、今後、百年、二百年と消え去らない業績を残したいものだと  
思う、今日この頃で、ございます。貴君がそれを頭の片隅に記憶しておいて、後日、そう  
いう先生に習ったこともあったなあ、と思い出していただければ、それで十分でございます。

Q.1 今日の講義を聞いていかに原典を読む事が大切かということが改めて分かりました。  
430 1回他の言語に訳された原典が日本語訳されたものは確かに元の原典とは違う意味になる  
と思うし、ましてや教授がそれを引用していることには驚きました。また、森有正さんの  
「思想から出発したら全然だめなのです」の考え方が、やはり哲学を学ぶ上で重要なのだ  
とも改めて感心しました。

435 A.1 件(くだん)の教授は、個人として哲学をやるのは、本人の自由ですが、私の規準から  
すれば(言い換えれば、私が学部生、大学院生として指導を受けた諸先生方を規準とす  
ると)、哲学を専門とする大学の課程(学部=学士課程、大学院=博士課程)の担当教員  
としては、著しく、学識、学殖が欠けている、ということになるので、ございます。こ  
ういうのを、その人のscholarshipには問題がある、というので、ございます。

440 Q.2 論理学についての、詳しい説明ありがとうございます。論理は、道具であるという考  
え方と論理学という学問として捉える考え方があるということがよく分かりました。また、  
前々回ぐらいの授業で取り扱った、論文の書き方、引用出典の表記についてや、原典で読  
むということについて、特に、原典で読むということについて、とても深いなあと思いま  
した。私も、訳の方ばかり読んでいて、原典を読んでおらず、教授から指摘されたこと

445 があったので、気をつけなければならないと感じました。

A.3 おっしゃる通りで、ございます。何であれ、「原典で読むということ」がまず、出発点なので、ございます。

450 Q.4 論文の書き方に関してですが、自分でこういった論文に出会ったときはすっぱりきって別の論文および原典にあたった方が結果として信用できるもの（少なくとも引用、出典、参考文献の範囲ですが）になるということでしょうか。もちろん、自分の力が至らない場合は問題外だとは思いますが。

455 A.4 「すっぱりきって」というのは、どういう意味で、ございましょうか？相手にしない、取り扱わない、ということでしょうか？自分の問題を論じる上で、必要ならば、扱ってもよいのでございますが、その場合は、どこがどうおかしいのかを徹底的に批判してさしあげるとよいでしょう。これも、ある意味で「すっぱりきる（切る）」ことのひとつでは、ございましょう。もちろん、どの場合も、当該の原典にあたることは必要でございます。

460 Q.5 （前半は、田中美知太郎先生の発言に対する批判、後半は、バカロレアについての論文を読んだ感想とお見受けします）

465 A.5 Q.-1に対するA.-1は、このQ.5(2014.11.16)を受け取る以前に書いたものなので、ここでは、Q5にコメントします。前半田中の美知太郎先生の発言に対する批判については、これを読む前に、Q-1に対して書いたことがあてはまると思います。つまり、「そうではない立場もあると主張したいのなら、それはそれでよいので、その人は田中先生と違う  
470 立場である、というだけのことで、ございます」ということです。田中先生の発言に対するこういう反応に接して、思い出すのは、田中先生がどこかで（今は思い出せません）、或る若者が、自分の関心事に関して、期待をもって、田中先生のところへ質問しに来たが、自分が期待する議論を先生から聞けず、がっかりして帰っていった、という話です。先生とは問題関心が違うのだから、他の先生のところへ行けばよろしいのでございます。最後の、「「雑」に関していえば、猫の例えからハイデガーの哲学への批判は、私はハイデガーの哲学を知りませんが、異和感があります」とのことですが、私は、ハイデッガーの著作を少々読んでいますが、別に違和感なく、むしろよく分かります。ハイデッガーを読んだ上で違和感があるというのなら、そういう人もいるでしょう、ということになりますが、しかし、ハイデッガーを知らないのに、異和感があるというのは、広い意味で哲学をやろうという人であれば、危険なのではないですか。この意味を考えてみてください。因に、  
475 田中美知太郎先生の昭和8年8月のノートに、「八月、またテアイテトス駅、28章まで。その間、ハイデガー「時と有」の第一部と「形而上学とは何か」を読む。しかし、どうも好きになれない」（田中美知太郎、『時代と私』、1984年、p. 262.）という記述があるので、ございます。後半の、バカロレアについての坂本さんの論文は私も読んでみました。  
480 私は、森有正先生が書かれたものは、他にも、高校2年のときから読んでいましたから、やはり、なるほど、というのが感想です。この制度の問題のひとつは、エリートにはよい

けれども、いわゆる、落ちこぼれる人には、別のルートが用意されていないと、そして、その別のルートも、社会的に一定の評価を受けている職業につくルートになっていないと、どの国でもできることではない、という点にあると思うので、ございます。その点で、日本では、内容は異なりますが、昭和20年以前の、いわゆる、旧制高校の制度が、これに近いかもしれない、実際、森有正先生のおじいさんの、森有礼が考えた日本全国の学区制は、フランスをモデルにしていたかもしれないので、ございます。最後に、「読後、「日本人は論争を好まない。」と日本人の性質として語られることが多いですが、そもそもフランスの高等教育を受けた人と比して、道具も材料も教育として与えられていないためなのではないかと思いました」と言っておられるのは、その通りだと思います。フランスでは、大学に入る前に、それをやっているわけですが、日本では、高校にそれを期待するのは無理ですから、大学に入って来た人達にまず、レポートや論文の書き方から勉強してもらわなければならないので、教養ゼミや、この入門の授業もその一部を受けもっていることになっているので、ございます。ところが、で、ございます、それを指導する、と申しますか、授業を担当する教員が、十分、そういう教育を受けているかという点とあやしいので、ございます。そういうliteracy（リテラシー、読み書きの能力、受けた教育、教養）といえますか、そういうものは、少数の出来のよい連中ならば、特別に教えられなくても、自分の先生が書く論文や本を読んで、いわば、落語家が師匠の芸を盗むように、間違いなく、文章作法を身につけるのですが（私どもの年代はそうでした）、そうっていない人が教員をしていたりすることがあったりして、困惑することなので、ございます（後で、プラギアート（Plagiat, plagiarism, 剽窃）についての事例を学んでいただきたいと思えます）。ところで、私は田中先生の書かれたものは、大学1～2年のころに読んだのですが、そのままにしており、学術的な論文は、必要に応じて、ときどき、読みかえすことがあるので、ございますが、今回、いろいろと質問していただきまして、一般向けの入門書の類いを読み返してみて、あらためて、今でも、ああそうだったと思う箇所に行き当たりました。論文ではありませんが、次の文章を読んでみてください。違和感があって嫌いかもしれませんが、学問としての哲学をやるには、自分の考えとは違い、表現方法や言葉使いも違うテキストを読んで理解する能力も必要です。

今日のわれわれは、いつも時代とか社会とかいふ容器のなかで自分をおいて考へるくせがついてしまつてゐる。これはをかきな傾向だとも言へる。むかしの人なら天地万物の間にわれをおいて見たのではないだらうか・・・（略）・・・時代といふものは出口のない箱のような形で、われわれを閉ぢ込めてゐるのではないといふことを知ればいいのである。時代の波に流されてしまへば、われわれは盲目のうちに自分を閉ぢ込めることになるけれども、しかしわれわれが正気を保つてゐる限り、われわれの意識は流れの上に出ることができるのであつて、いはゆる時代の進歩は、いつもこのやうにして一歩先に出る意識から始まつてゐる。[田中美知太郎、『時代と私』, 1984年, p. 2およびp. 19.]

520

Q.0 今日の講義を聞いて、哲学の学問区分は、とても奥が深く難しそうだなあと感じました。また、前々から先生がおっしゃってられているように、哲学の教授が実は学部生時代は倫理学を学んでいたりなど、哲学や倫理は密接に結び付いているのかなあと感じました。

525

A.0 アリストテレスの学問区分は、アリストテレスによる対象の区別基準を認める者にとっては、納得のいく区分ですが、これを認めない人は、アリストテレスとは異なる区別の根拠を示す必要があります。その点で、レヴィナスのvisage（ヴィサージュ、なまざし、顔）は、感情や経験に訴えて、そっそうですかあ．．．と説得されそうな、迫力があるので、

530

ごさいます、Sollen（ゾレン、当為、～すべき）をSein（ザイン、存在、～である）の根拠であり、基礎づけるものであると主張したいのならば、プラトンの「太陽の比喻」の

530

ほうが説得力はあると思いますが、みなさんはいかがでしょう。なお、後半のことについては、私の知る限り、学生時代（学部）は哲学専攻で、先生として、倫理学を担当した、

535

天野貞祐先生や、現に担当しているM先生（京大）、T先生（東北大）のような例は何人も知っていますが、学部時代に倫理学専攻で、先生として哲学担当というのは、一人しか知りません。哲学を担当するには、その人の狭い意味での専門が何であれ、学部時代から、

535

古典語（ギリシア語・ラテン語）と論理学を一通りやって、ある程度、英独仏のテキストを読む演習を担当できるレベルの学識をもっていないと、つとまらないんじゃないですか。

540

Q.1 アリストテレスの学問領域区分について様々な学問に貢献していることが分かりました。紹介された以外にアリストテレスの考え方が応用されている学問はありますか？

545

A.1 アリストテレスの学問区分の考え方自体は、どちらかというと、紹介したレヴィナスのように、批判の対象としては（批判され、否定されるべきものとして）、人類の知的営みに対して貢献していると、言えなくもないと思いますが、動物学などの観察事実の報告などを別にすると、現在では、狭い意味での哲学の領域で、「実体」「属性」「現実態」「可能態」「範疇」などの、いわゆる哲学的概念装置というか、考え方のモデルを、よくもわるくも提供している、という意味で、アリストテレスは現役の哲学者ではないかと思えます。

550

Q.2 赤井先生が高校の頃から、フランス語、ドイツ語、ラテン語を既に読めていた（かじっていた）というのがさすがだと思いました。語学は、早く始めた方が良いのはもちろんなのでしょうが、年齢的に遅すぎるということはあると思われませんか。

555

A.2 学ぶ必要があると自覚したときが、その人にとって、一番早い時期なので、年齢がいくつであろうと、必要だと思ったときから始めたらよいので、遅すぎるとか、言っても仕方ありません。晩年のベルクソンが、文献を読む必要から、それまで学んでいなかったスペイン語を習っている、ということ、九鬼周造が伝えています。また、田中美知太

560 郎先生の『時代と私』（昭和59(1984)年、文芸春秋）は、敗戦(1945年)までのことが、  
書かれていて、書名に反して、哲学の流行という点では、いかに田中先生が時代の流れに  
影響されなかったかが書かれています。具体的にいつ、どんな本を買って、読んだか（原  
典でも書かれていて、興味深いものがあります。戦後、京大の西洋古代哲学史の先生に  
565 なってからは、ギリシア哲学の専門家というイメージがあるかもしれませんが（そして、  
それはそうなのですが）、カント（『純粹理性批判』）、ヘーゲル（『精神現象学』『エ  
ンチクロペディー』『歴史哲学』）、トマス・アクィナス（『デ・エンテ』）、デカル  
ト（『精神指導の規則』『省察』）、スピノザ（『エティカ』）、ライプニッツ、ニー  
チェ、ボルツァーノ（『知識学』）、ベルクソン、コヘン、フッサール（『論理学研  
570 究』）などを読んでいることがわかります。これら以外にも、プラトンやアリストテレス  
はもちろん、ギリシア・ラテンの文献や、その研究書の類も読んでいるので、西洋古代・  
中世・近現代哲学史を一通り原典で勉強しているようです。哲学をやろうとするならば、  
細かい専門としては何をやるにせよ、これが普通の感覚（センス）だと思います。

570 Q.3 . . . このたびの『哲学を学ぶ人のために』のやりとりで、自らの初学者としての在  
り方と、人間というものを哲学の場で考えるという自らの興味と、ご指摘の社会学をはじ  
めとする諸学の実態をふまえるという、取り組むべきものへの理解が深まったと思います。  
A.3 関心をもつ対象に応じて、いくつもの方法や切り口が可能でしょうから、いろいろ、  
試してみるとよいでしょう。

575

580

585

590



595 Q.0 配布された卒論が内容的にも文章構成的にもよくできていたので、はじめ論文のレベルはこれほど高いものを要求されるのかと驚きました。剽窃とわかって言い方は悪いですが少し安心しました。

A.0 安心していただいても困るのでございますが。 . . . . .

600 Q.1 本日も、具体的な内容の授業でたいへん勉強になりました。引用される他人の考えと自分の考えでは、他人の考えのほうが重視される場合のほうが多いという言葉は、肩の力が抜けました。また、ビデオの最終部分での、その上で他者との考えと対話をはじめるのだという言葉ははげみになりました。

A.1 現に生きている人とは、直接の対話(dialogos, ディアロゴス)によるやりとり、問答  
605 が可能ですが、すでに過去の哲学者が残した著作を読んで、そこに表明されている考えと対話することは、その著作を読む私たちの学識や思考力に応じた、様々なレベルの対話がありえるのでございます。プラトンの対話篇は、プラトン自身が想定した登場人物との対話ですが、これを読む私たちは、ある意味で、プラトンと対話していることになるので  
610 ございます。その内容やレベルは、プラトンよりも、それを読む私たち次第なのでございます。プラトンの対話篇をどう見るかについては、古来、専門家の間でいろいろ議論が  
615 ございます(これも、まず、哲学史としての研究課題でございますし、現代の私たち自身にかかわる問題でもございます)。また、アリストテレスは、その場に、問答する相手がいなくても、一人で二役を演じて、問答の訓練をすることを思考のトレーニングとして述べています。これは、プラトンに由来し、アリストテレスもそう考えていたと思われる  
615 のですが、人がひとりで思考する、ということは、実は、自己との対話なのだ、という発想を彼らはもっていたからなのでございます。

Q.2 授業中に見せていただいた卒論に関してですが、児玉先生の『功利と直観』は、参考文献には挙げられていたのでしょうか。そうでないのなら見つけた赤井先生がすごいです  
620 が、もし挙げられていたのなら指導教員の先生が気付かなかったのは手を抜きすぎのよう  
に感じられてしまいます。

A.2 論文末尾の「文献」の一覧にあがっていましたが、そのどこをどう読んで利用した  
のかがわからないので、学生の論文と、児玉『功利と直観』の両方を読んで、発見したので  
625 ございます。こういう作業は、何かあらたなことに向けての研究ではなくて、すでに  
行なわれてしまったことの後始末、ゴミの回収(現実の収集業は、立派な職業でございます、  
念のため)、汚れの掃除のような、後ろ向きの仕事なので、したくはないのですが、こ  
ういうことを学生にさせてしまう教員といい、こういうことをしてしまう学生といい、そ  
ういう方々がおられるものですから、気付いてしまった以上、放っておくのは、教員として  
無責任であると思い、時間を割いているのでございます。この授業の受講生のみなさんに

630 は、決して、こういう学生や教員にならないでいただきたいものでございます。（が、本人たちが、今、自分がやっていることがいけないことであると、気付いていないと、どうしようもないのでございますし、気付いて、つまり、意識的にやっているなら、もう救われないのでございます）。

635 Q.3 剽窃について、あまり意識することなく、けっこう今までの発表などで、やってしまったなと思いました。出典を明示するだけで、あとは、さも自分が考えたような感じでレポートなどを書いていました。これからの発表などでは聞き手に書いてあることが自分の意見なのか他人の意見なのかが分かるようにしていきたいと思います。

640 Q.3' 今日の授業で引用に関する実際の論文を見たり、動画を見たりして、何が問題であるのか、なぜ犯罪であるのかということについて、とてもよく分かりました。また、本を読んでレポートを書く際に、今まで意識していませんでしたが、私もひょう窃をしたことがある気がします。

A.3 これからは、意識して、レポートなり、論文なりをお書きになるように、お願いいたします。

645

650

655

660

665

670 Q.0 教材の31ページ、ニーチェのプラトンのテキストの言葉は、哲学が動詞であることを  
を新めて思い出させてもらいました。また、本日の授業からプラトンの真の考えは伝えて  
もらえないかもしれないですが、あれかこれかと考えることで哲学を行なえると思います  
し、考える材料として、なお重要であると考えました。

675 A.0 そうでございますね。しかし、前半の「哲学が動詞であることを新めて（ママ、改め  
て？）思い出」すとは、いかなることでございましょうか。カントの、例の「哲学  
(Philosophie)」を学ぶことはできないけれども、「哲学すること (philosophieren)」  
を学ぶことができるだけである、ということでしょうか。

680 Man kann also unter allen Vernunftwissenschaften (a priori) nur allein  
Mathematik, niemals aber Philosophie (es sei denn historisch), sondern,  
was die Vernunft betrifft, höchstens nur philosophieren lernen. [I. Kant,  
*Kritik der reinen Vernunft*, B 865]

685 だからすべての（先天的）理性の学のうち数学だけが学習されうる、哲学は（歴史  
的ならざるかぎり）学習されえない、かえって理性に関しては、せいぜい哲学する  
こと(philosophieren)が学習されうるだけである。[カント／天野貞祐訳『純粋理  
性批判』]

690 ここで、言われていることのポイントは、確かに、「哲学は学習されえず、せいぜい哲学  
することが学習されうるだけである」ということですが、しかし、同時に、カントは、哲  
学は、歴史的にであれば、学習されえる、とも言っているのです。問題は、「理性に関し  
ては(was die Vernunft betrifft)」という箇所の解釈次第ですが、哲学史を研究すること  
が、そのまま、哲学することにはならなくても、自分の頭で、問題を考える（哲学する）  
訓練には、大いになるだろうということです。この点で、哲学することと、哲学史の研究  
は分ちがたい関係にあると思うのでございます。そうだとすると、哲学するためには、勿  
論ですが、哲学史の研究のためには、それなりの道具が必要なので、その道具の性能次第  
695 で、その人の哲学することの水準も、哲学史の研究も、よくもわるくもなるのでしょ  
う。この場合、道具として考えられるのは、（外国語の）読解力と論理学（の知識、論理的思  
考力）でございます。そして、これらに基づいた、正確な哲学史の知識でございます。

700 Q.1 今日の授業で赤井先生が求める哲学の論文の書き方というものが分かりました。自分  
も理解していない難しい哲学用語（を）引用して、それっぽくとりつくりようではなく、  
原典や他の論文を参考にして、それを正しく引用し、それをふまえて自分の考えを述べる  
ような論文をもとめているのだと考えました。やはり、以前学習した、森有正さんの考え  
方に通じるものがあるなと思いました。

705 A.1 他人が言っていること（書いていること）と自分の考えを、同じであれ、違っている  
のであれ、峻別することが出発点である、ということです。

Q.2 今日の講義を聞いて、有名なハイデガーも剽窃のようなことがあったのだと聞いて、  
とても驚きました。また、論文引用の例を実際に見ることが出来て、とても勉強になりました。

710 A.2 クローチェの考え方を自分のものにして、さらに展開したサルトルのような天才的な  
やり方になると、クローチェからサルトルが取ったものよりも、サルトルが展開したもの  
のほうに価値が認められるので、クローチェとの関係で、サルトルを非難する人はほとん  
どいない、ということになるのですが、ハイデッガーの場合は、『茶の本』が言及してい  
る『莊子』や『淮南子』の発想と表現（英語とドイツ語の違いはあっても）のままなので、  
715 ちょっとマズイでしょう。自分が書く、レポートや、論文での引用に関しては、自分の専  
門分野の先生方が書かれている論文や本を見て、註の付け方など、実際のやり方を見るの  
がよいと思います。

720

725

730

735

740

Q.0 中世の大学で、神学部・医学部・法学部に進めなかった人たちは、どんな職に就くのでしょうか。

745 A.0 わかりません。大学を出なくても就ける職のほうが多いでしょうが、中世にあった職業をお調べになってはいかがでしょうか。

Q.1 哲学的な主観と客観について、説明を受けると何となく何が言いたいのかは分かりませんが、そこまで深く考える必要があるのかと正直思います。難しいですね、哲学は。

750 A.1 それほど、深い、ということはありませんし、主観と客観の問題と、言葉がどう使われていたかは、大問題です。

Q.2 今日の講義で、昔の大学において哲学がどのように学ばれていたかという話を聞いて、とても面白いなあと思いました。しかし、なぜ今のような制度に変わったのか、不思議に思いました。

755 A.2 ヨーロッパや北米ですでに変化して存在していたものを、明治期に部分的に取り入れた成れの果てが今の日本の大学だと思いますので、専門ではないとはいえ（専門的なことは、西洋教育史の専門家に任せます）、ある程度、そのもとの大学がどういうものか、知っておく必要があるでしょう。素人が読んで、なるほど、と思わせてくれるものに、以下のようなものがあります。

Haskins, Ch. H., *The Rise of Universities*, 1923(1990), Ithaca and London: Cornell University Press. (C. H. ハスキンス/青木靖三・三浦常司訳『大学の起源』, 1977, 社会思想社, 現代教養文庫951)・・・邦訳の付録(資料)中の訳語には、問題があるものが見られるけれども、中世ヨーロッパの大学の様子を知るには、格好の書物でございます。

765

エリック・アシュビー/島田雄次郎訳『科学革命と大学』, 1977, 中公文庫。

潮木守一『ドイツの大学, 文化史的考察』, 1992, 講談社学術文庫。

潮木守一『アメリカの大学』, 1993, 講談社学術文庫。

潮木守一『京都帝国大学の挑戦』, 1997, 講談社学術文庫。

770

Q.3 前半の大学史の話題は、自分が大学で何をどう学んでいるかを考え直すきっかけをいただきました。中世・近世の大学教育史を調べてみようと思いました。

A.3 ご自分で調べるのはとてもよいことです。A.2に掲げた書籍の文献表に、さらに詳しい文献があがっていますので、参考にしてください。

775

Q.4 objectiveとsubjectiveの話、非常に興味深く聴かせていただきました。言葉の意味の変化などは言語学的な側面もあると思うので、一度本を探してみたいと思います。

A4 そうなさってください。今日授業では、前回のobjectiveの例に続いて、subjectiveの例を紹介しますが、今私たちが読んでいるテキストで使われている言葉が、どういう経緯で、今のような意味合いになったのか、その歴史的、哲学史的背景を知ることによって、現代語の辞書を引いては分からない意味が浮かび上がってきます。objectiveとsubjective以外の言葉についても、皆さんに自分で、そういう発見をしてもらいたと思います。

785

790

795

800

805

810

Q.0 赤井先生は時々関西弁になられますが、出身は関西なのですか。(関西弁を喋っている赤井先生を見ていると、親父を思い出します...)

820 A.0 両親とも、もともと神戸の人なのですが、親の転勤のため、生まれは福島県の三春、その後、幼稚園～小学校6年の1学期まで、群馬県太田市、小学校6年の2学期～高校は、神戸市東灘区ですわんけど、大学は、名古屋市昭和区だがや、大学院から12年くらいは、京都市で左京区でおます。その後、東広島。学会や研究会で、関東系の学者から質問されたときに、関西弁のイントネーションで、「そない考えるからあかんです」と言ってるのが快感です。

825 Q.1 宿題のテキストに取り組んで、前々回の講義で取り上げられた、テキストにされると筆者の思想がそのものとして、現われず、読み取る者にたくされるとということが実感できました。また、英訳2例の表現のちがいに、原典にふれる意義もよくわかりました。

830 A.1 デカルトのラテン語の英訳としては、Haldane & Rossのものは、アクロバティックな前置詞つき関係代名詞による訳ですが、わかりましたか。あたまの体操としても充分有効だろうと思います(17世紀のフランス語訳も現代の英訳ももっと素直な訳をしています)。今回、また、宿題として読んでもらう田中美知太郎先生は、他の先生が日本語訳を用いる場合でも、田中先生は、授業では、必ず、何語であれ必ず外国語のテキストを使ったと言っておられます。これは、おそらく、学生に頭を使わせるための教育的配慮だった

835 だろうと思います。

Q.2 オッカムのb(ママ, s)ubiectum(基体)の使われ方について魂や精神を伴うものと、感情的なものを必要としない基体の使われ方があり、訳するのが難しいことがわかりました。

840 A.2 授業では、14世紀のオッカムのテキストに、「魂・精神を基体としてsubiective観念や概念がある」と言われているのを確認しましたが、ここで、魂や精神が基体subiectumとされるという場合の「基体(subiectum)」は、現代の私たちの使う「主観的」という意味でのsubjectiveに通じることが分かると思います(いわゆる逆転)。別途、資料として配布した、近世哲学史が専門のはずの某先生が「その逆転の兆はすでにデカルトに認められよう」などとのんきなことを書いていますが、17世紀のデカルトどころか、

845 すでに、14世紀のオッカムにその用例があるということです。近世ばかりやってる奴ら!ちゃんと中世のテキストをラテン語で読め!近世のものだけ読んで、無責任なことを言うな!と言いたいところですが(もう言ってます)、ぼやきはこの辺りにしておきます。

850 Q.3 今日の講義を聞いて、subiective(基体として)という派生語はとても奥が深いなあと思いました。

A.3 わかっていただけで祝着至極にございます。

855 Q.0 派生した議論として、高校以前の教育で、テキストを理解し、考えを創り出す能力開発するために、現在受講しているような訓練が必要だと考えました。先日いただいたテキストで「観念」と訳されている語が「idea」（ママ，“idea”）であると知って、文章の内容が自分にとって変わったという体験から、多言語でテキストにあたることの大切さがわかりました。

860 A.0 欧文の引用は，“idea”のようにしてください。さて、哲学の問題は、問題そのものを日本語でも何語でも考察・探究しなければならないわけですが、まず最初に、問題提起している者が使っている言語が日本でない場合は、まず、その原語に直接あたって考えてみるのがどうしても必要でしょう。次にそれを、われわれの場合なら、十全に日本語で表現する努力が必要になるわけですが、扱われる問題の内容次第ですが、機械的に翻訳できないことが多いと思います。

865 Q.1 哲学教師の質の低下に関して昭和30年代に比べると、質は向上していないということを知って残念でした。その対策として、哲学という科目を高校で設置したり、ギリシャ語を高校で学ばせたり、国語でより論理的な文を読ませることなど、非常に興味深い議論ができました。

870 A.1 誰か文部科学大臣になってやってくれませんかねえ～。

875 Q.2 「人文科学において、その意見が新しいか、古いかではなく、真理かどうかということが重要である」という言葉を聞いて、確かに歴史学においても、学説が二転三転することはよくあることで、古い学説の方が結局正しかったということもあるので、「人文科学」において、どの分野でも同じなのだなぁと思いました。また、同じ本の翻訳においても全く違う意味のように捉えられることが出来るということを知り、驚きました。

880 A.2 こと、翻訳に関しては、言語感覚に優れていた、幕末から明治期の人たちの訳したもののほうが、いい線いっていることがあると思います。今、以前より多くの外国後文献を日本語訳で読むことができ、片仮名の外来語のまま、理解したつもりになっているわたしたちのほうが、彼ら（幕末、明治人）がもっていた、言語感覚（これ！というものを探り当てる勘のようなもの）がなくなっているのではないのでしょうか。

885



890

Q.0 今日の講義を聞いて、哲学用語というのは明確には定まっていないのだということが改めてよくわかりました。1つ、質問があるのですが、別の哲学の授業で哲学の世界では、歴史を「科学」として捉えると聞きました。私は歴史は人類の歩んできた事柄を人文学として捉えると思います。赤井先生は、歴史は「科学」として捉えるべきであると思いますか？

895

A.0 質問で使われている「歴史」と「科学」、それに「人文学」の定義次第だと思います。問題は、別の授業での「哲学の世界では、歴史を「科学」として捉える」では、「哲学」も「世界」も問題ですけれども、それは私にはわからないので、おいておくことにしましょう。まず、私の答ですが、「歴史」を「史学」（学問としての「歴史学」）、そして、「科学」を「学、学問」と理解するかぎり、「歴史は科学」である、と言えると思います。しかし、これは、例によって、現在の日常的な日本語の感覚からすると、違和感・異和感があると思います。その原因は、「歴史」にも「科学」にもありますが、特に、「科学」という日本語のほうに問題があります。このことに関しては、私の「科学哲学・科学思想史」のイントロダクションで扱っているので、その授業を受講した人には、既知のことですが、簡単にしておきましょう。

900

905

Q.1 プリッツはとても（ママ）おいしかったです。赤井先生は実際に外国に行かれて、哲学を勉強されたことはありますか？

910

A.1 某先生に会いに行ったり、大学・図書館に調べものをしに行ったことは何回かありますが、長期間滞在して勉強のために行ったことはありません。

Q.2 講義の最後で読んだニーチェの文は、昔、学生の時に読みかけた時を思い出した文体でした。

915

A.2 信太さんの訳は原典に忠実な優れた訳文だと思いますが、ドイツ語原典のほうがわかりやすいと思います。

920

925

930 Q.0 西洋哲学入門では、原典を読むことの大切さや、レポートの書き方など、哲学以外のこともたくさん学ぶことができました。特にレポートの書き方などは知らなかったことが多く、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。レポートがんばります。

935 A.0 頑張ってください、と言うべきかもしれませんが、ひところ、「がんばらくていい」ということがよく言われました。レポートは、自発的に自分がやりたいと思う範囲で、また、自分で出来る範囲で、やってください。「がんばる」というのが、もし、もともと、「眼(がん、目のこと)をカッと開いて、自分に気合いを入れる」ことだとすると、自発的な意味をもつ自動詞ですから、本来、自分で自分に言うものであって、他人から言われることではない、ということ思い出しました。

940 Q.1 「権威」についての講義は、現在のテレビのワイドショー化している状況によく表れて(ママ、現れて)いると思いました。ある専門家が諸般のできごとについてもっともらしい意見を述べていることに疑問(ママ、問)を感じていました。わからないことはわからないと表明することは大事なことだと思います。「歴史」と「歴史学」--「哲学」と「哲学史学」のアナロジーについて、その後も考えてみましたが、うまくいきませんでした。同様に語れるような関係が見い出せませんでした。

945 A.1 「権威」についての話は、プラトンの『ソクラテスの弁明』で、ソクラテスが言っていることでもあります。後半の、「哲学史学」という表現は、はじめて見るのもので、何のことか、説明して欲しいところです。「哲学」と「哲学史」ならば、説明なしに一応の理解が可能ですし、また、従来、大学で行なわれている「哲学」は、本来の「哲学」ではないという批判を込めて、「哲学学」だ、と言われることはありますが、「哲学史学」というのは、はじめてです。「日本史」に「学」をつけて「日本史学」とか、「東洋史」に  
950 「学」をつけて「東洋史学」とかは言われますが、「哲学史」とか「科学史」に「学」をつけた言い方は、これまで見たことがありません。たしかに、「哲学史」は、「哲学」ではなく、「史学」の一種である、という立場からすれば、そうなるのかもしれませんが、それでも、名称としては、「哲学史」としか言わず、「哲学史学」とは言わないと思いま  
955 す。

Q.2 今日の講義を聞いて、そもそも私の思っていた「科学」の定義が違うのだということに気付かされました。今は、「科学」というと、生物や物理、化学などを想像してしましますが、本来はそういった意味ではなく、もっと、広い意味を含んでいたということを知り、とても驚きました。丁寧な解説ありがとうございました。

960 A.2 ギリシア語のepisteme(エピステーメー)とラテン語のscientia(スキエンチア)については、授業で述べた通りです。資料では、17世紀のパスカルのフランス語のscienceの例を掲げておきましたが、この例で分かったように、17世紀には、両方の意味

965 で用いられていました。19世紀後半のミルになると、今の私たちの分類でいえば社会科学  
になる、「政治学」にも、scientific politics (J. S. Mill, *Inaugural Address delivered  
to the University of St. Andrews*, 1867, London, p. 33; ミル／竹内一誠訳『大学教育  
970 について』, 岩波文庫, p. 93 )という表現が使われていますが、science のモデルとして  
は、いわゆる自然科学系の諸学(数学や論理学, 化学など)が想定されているようです。  
やはり、問題は、日本語の「科学」のほうにあるのでしょうか。「科学」の「科」は、も  
と、種別, 区別, あるいは、項目の別を表しているだけなので、「自然科学」という意  
975 味はなかったはずです。実際、大槻文彦の『言海』には、記載されていませんから、もっ  
と新しい言葉かもしれません。昭和46年(1971年)の三省堂『明解国語辞典』では、「科  
学: いくつかの仮定の上に立って一定の目的・方法のもとに対象を系統的に研究する学問。  
サイエンス。ヴィッセンシャフト」とだけありますが、2013年の同じく、三省堂『新明  
980 解国語辞典』には、「科学: 一定の対象を独自の目的・方法で体系的に研究する学問。雑  
然たる知識の集成ではなく、同じ条件を満足する幾つかの例から帰納した普遍妥当な知識  
の積み重ねからなる。[広義では社会科学・人文科学を含み、狭義では自然科学を指す]」  
とあります。この最後の[ ]内の但し書きが大切で、質問者が受講した、別の授業の担当  
985 者が、どちらのつもりで「科学」と言ったのかによって、話は変わってきます。

980

985

990

995